

報 医 人 世 々



目 次

- 巻頭言 「iPS細胞の恩恵」
気仙医師会 副会長 飯 塚 和 彦… 2
- 理事会報告…………… 3
- 随 想
「近況報告」陸前高田市国民健康保険広田診療所
近 江 三喜男… 8
- 「新年だけど2012年の回顧」
岩手県立大船渡病院小児科 大 津 修… 9
- 医院紹介…………… 10
鳥 羽 医 院
石倉クリニック… 11
- 県立病院各科紹介
岩手県立大船渡病院 第一外科長 中 野 達 也… 12
- 学術講演会
「てんかん診療の新時代～誤診と誤治療から学ぶ」
東北大学大学院医学系研究科 てんかん学分野
教授 中 里 信 和… 14
- 気仙医師会忘年会並びに
山浦玄嗣先生・佐々木道夫先生の表彰祝賀会… 15
- 新入会員の紹介…………… 16
- 事務局日記…………… 17
- 編集後記…………… 18
- 表紙のことば…………… 18



第 1 2 4 号
2013. 1. 25

気 仙 医 師 会
岩手県大船渡市盛町字内ノ目 6 - 1
TEL: 0192-27-7727 FAX: 0192-26-2429
<http://kesen-med.or.jp/>

巻頭言



iPS細胞の恩恵

気仙医師会 副会長
飯塚眼科医院 院長

飯 塚 和 彦

京都大学の山中伸弥教授が、iPS細胞でノーベル医学・生理学賞を受賞したことを伝えるニュースが、テレビ、新聞等で華々しく報道されたことは、記憶に新しいところである。暗いニュースばかりが目につく中、日本人にとっては、ロンドンオリンピックでの日本人選手の活躍に次ぐ明るいニュースであった。iPS細胞から、ありとあらゆる細胞が作り出せるわけだから、再生医療分野では画期的なアイテムになることは、間違いないであろうし、医療の様々な分野での応用が、現実味を持って、多くの研究者の手によって具現化されつつあると聞いている。研究が進むにつれ、医療に多大な発展をもたらすものと思われる。

その一方で気になるのは、このような最新の研究がもたらす多大な賜物が、臨床レベルで提供できるようになった際に生じる、医療の進歩によるさらなる高齢化と、それに伴う社会的なコストの問題である。これまで治療困難であった疾病も治療可能になり、平均寿命はさらに延びるであろうし、最新の治療には、それなりのコストがかかるであろう。医学的な研究が日進月歩である現在、常々考慮しなければならない課題であろう。

今や日本は有数の少子高齢化社会であり、増加する社会保障費への対応は、政治的な最重要課題のひとつである。そこに日本の皆保険制度を脅かす TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）参加の問題も浮上している。iPS細胞のような素晴らしい医学の進歩も、広く人々がその恩恵を分かち合うためには、政治の力を抜きには考えられない。皆保険制度が崩壊し、iPS細胞によって開発されたこの治療法は、保険が利きません、全額自己負担ですとならぬよう、願うばかりである。

随 想



「近況報告」

陸前高田市国民健康保険広田診療所

近 江 三喜男

以前は依頼原稿もさっさと書いたものです。津波後はインターネット環境が整わない時期から、iPod touchを駆使して何本かの依頼原稿を書きあげました。今回はさっぱり進みません。先日、某新聞社が取材に来ましたが、ネガティブな意見を喋りまくってしまいました。津波後のPTSDかもしれません。

本、写真、PCも流失し、過去が失われてしまったようで履歴書1枚すら簡単には書けません。いっその事、新たな自分を生きようと思っても一歩が出ません。週末は仙台に帰りますがほとんど外出しない"引きこもり"状態です。喪に服しているような身には、津波関連の報道、復旧、復興、"絆"関連番組などとても目障り、耳障りです。

夢は「美しい三陸海岸が庭の先に望める機能的で小さい家に住むこと」でしたが、夢までも流されてしまいました。広田小学校の避難所で3ヶ月間過ごしました。一昨年8月下旬からは仮設診療所で診療しています。狭い職場では歩くことも少なく、散歩する場所もないので筋肉が萎えてしまいました。これではまずいと思い昨年の秋から本気でウォーキングをしています。家の周りを30分間、1日5千歩を目安に歩いています。寒いし暗いし楽しくありませんが、最近では早足で歩けるようになり、リハビリテーションの効果は明らかです。フィジカルの回復に伴ってメンタルも回復し、今やっとキーボードを叩いています。考えてみれば自分は若い頃からフィジカル頼みで勉強や仕事をこなしてきたことをすっかり忘れていました。

小生にしてこれですから、地域の多くの被災した高齢者はフィジカル、メンタルともに厳しいことでしょう。昔から広田では年をとっても海の仕事に携わり、家族にも大事にされていたと思われます。津波で家が流され、家族がバラバラになり、狭い仮設住宅にひきこもり運動不足になり、地域の交流も少なくボケ気味の老人も多いようです。また、津波後耳が遠くなった老人も多く診療に困難を感じる事が最近目立ちます。一般の診療の患者数にはあまり変化はないようです。津波前は20名を上限として訪問診療を行っていましたが、家族の介護力の低下に伴い介護施設に入所した方も多く、現在は半数以下になっています。多くの医療施設が被災したこともあり、マスコミでは在宅医療、訪問診療の重要性を取り上げましたが、結果的には地域医療の抱える潜在的、根本的な問題点から焦点がズレただけのようでした。

今日まで気仙の人々は医療過疎のなか、豊かな自然に恵まれて生き、医療の介入が少ない"自然死に近い死"を受容しつつ生活してきたように思われます。津波で余りにも多くの人たちを一瞬にして失った経験は、多くの人々に自然とは何か、文明とは何か、生命とは何かを改めて考えさせましたが、自分にとっては"医療における自然死としての病死"について考えることが多くなったように思われます。



新年だけど2012年の回顧

岩手県立大船渡病院 小児科

大 津 修

確かに、11月中に原稿を依頼された気がするが、すっかり忘れていた。催促のFAXが届き、慌てて書き始めている。ので、気の利いたテーマが思いつかない。とりあえず、2012年を振り返ってみることにした。

1月、2月： 寒かった。たいして大きな出来事はなかった。まあ平凡だったんでしょう。

3月： 女房が「頸椎症」の手術を受けた。手術直前には、痛みも激しく物を握ることも腕をあげることもできなくなり、家事全般はほとんど不可能になっていた。術後、症状は劇的に改善し普通に生活しているので、結果OKである。関係方々に感謝至極。

4月： 次女が小学校に入学した。これで子供3人は全員小学生になった。

4年生の長男が野球のスポーツ少年団（スポ小）にはいった。3年生の長女も入った。いまだき女子も珍しくない。スポ小は学校の部活とは違い、親の負担が大きく、父親はグラウンド整備や試合の審判をやらされる。ちなみに、長男と長女が在籍する「仁王ジャイアンツ」は市内最弱で、大抵10点以上の差で敗戦する。へぼ野球は見ていて微笑ましいが応援は正直いって疲れる。

8月： 台風の合間をかいくぐって、家族で沖縄旅行にでかけた。子供たちは、初めての飛行機に興奮し、南国のビーチや水族館を満喫した。帰りの飛行機中で、長男が帰りたくないと泣き出した。4年生にしては幼い気もするが、よほど楽しかったのだろう。こちらも少しウルウルした。

ロンドンオリンピックがあった。別に家族には関係ないが、個人的にオリンピック観戦にそそぐ情熱は異常なので、2012年の夏はこれ抜きには語れない。メダルをいっぱいといったとマスコミは興奮していたが、期待外れの種目も多く（柔道男子の惨敗は深刻である）、実は"金"メダルは少なかったのである。リオに期待。

10月： これも家族には関係ないが。阪神タイガースの金本知憲選手が引退した。僕にとっては、これが（家族の出来事以外で）2012年1番の出来事である。思いが激しすぎて、文字にできない。

11月： 次女の七五三。本来、数え年なら前年だったが、震災でバタバタしていたので1年延期した。これで全員、七五三終了。やれやれ。

12月： 総選挙。AKBでなくて衆議院。あまりにもシラケタ雰囲気、誰にも投票したくないので、本気で「大島優子」って書こうかと思った。安倍政権のようだけど、なんだか、スゴロクで「五つ戻る」にあたったみたいだ。今では懐かしいが5年前、大船渡病院は1年間だけ循環器科が引き上げてパニック状態になった。この時がちょうど「安倍政権」だったので、不吉な感じがして、ちょっとゾッとする。関係ないかもしれないけど。

ここまで書いて、発行が新年であることに気が付いた。ちょっと後ろ向きな随想だったけど、まあいいか。2013年、巳年。もうすぐ震災から2年。皆様にとって、より良い年でありますように。散文大変失礼いたしました。

医 院 紹 介

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

鳥羽医院内科・消化器内視鏡科

吉 澤 熙

鳥羽医院は、昭和22年故鳥羽義行義父が当時の気仙郡小友村小友駅前（現JR大船渡線）に鳥羽内科・小児科医院を開院した。義父は、博物学者で名高い鳥羽源蔵の弟で獣医をしていた源篤の三男として名古屋で生まれ、父と共に朝鮮（現韓国）に渡り、父から医学の道に進むように勧められ、大邱医学専門学校を昭和10年に卒業した。

卒業後内地に引き揚げ気仙病院（現大船渡病院）内科に勤務、その後気仙郡南病院（現県立高田病院）、気仙病院綾里診療所長を経て昭和17年太平洋戦争に応召し、ラバウル・ニューギニア方面を転戦、九死に一生を得て終戦後帰還した。昭和21年気仙病院に復帰、赤崎診療所に勤務した後小友に開院した。

当時の小友村には内科小児科医院はなく、医療一筋に地域の人達の健康を守り役立ってきた父に頭が下がる思いである。学校医として長年の功績を認められ岩手県及び陸前高田市から表彰をうけている。義父は平成7年12月11日に82歳で他界した。

昭和46年、当時小生は東大内科学教授田坂定孝先生の勧めで千葉県旭市にある総合国保旭中央病院内科に勤務が決まっていたが、東京築地の国立がんセンター病院で消化器内視鏡を研修中であった。

完治が可能な早期胃がんの概念が確立しつつあった頃で、早期がん発見のため多数の専門医が求められる時代が緒に就いたばかりだった。

当時内視鏡部長であった崎田隆夫先生から、「がん患者を救うためには早期胃がんを沢山発見することに尽きる。君にそれが出来るか」とウイスキーを飲みながら膝詰談判で約束させられた事を鮮明に思い出す。

15年間にわたり旭中央病院内科・消化器内視鏡科に勤務した後、義父から乞われ昭和60年7月に鳥羽医院を継承した。

現役中に高田市周辺住民を5万人、上下部内視鏡による検診をひそかに願って励み、延べ約46,500人に達したが、昨年の大震災津波により医院が全壊したため、未だ目標を達成していない。

一昨年12月に旭中央病院に勤務していた息子が内視鏡に習熟し当院に勤務し、医院を継承することとなったばかりだった。

国内外の支援により、本年7月に小友町地内の高台に新医院が完成し診療を再開することができた。検診の継続が可能になった事を嬉しく思っている。

災害により医師不足がさらに進む中、病診・診々連携を密にし、地域住民の健康維持のために微力を尽くしていきたいと願っている。

2012年12月18日



石倉クリニック 院長

石 倉 功 一

今回から始まった、けせん医報の医院紹介コーナーなので、どのように書けばよいのか見当が付きませんが、まずは、院長の簡単な経歴からお示しします。1962年9月生まれの50歳、地元大船渡高校卒業後、弘前大学医学部入学、卒後は岩手県立中央病院で1987年から2年間各科ローテート研修をしました。その後、岩手医大泌尿器科へ入局し、関連病院などを経て県立大船渡病院泌尿器科に2年間在籍した後の2005年5月、石倉クリニックを開設しました。

当院の特徴を簡単に説明するために、開業お知らせ広告に記載した内容を転記してみます。

『このたび、生まれ故郷である大船渡の地で「石倉クリニック」を開院することとなりました。県立中央病院、大船渡病院在職中は、公私にわたりひとかたならぬご厚情を賜り厚く御礼申し上げます。

これまでの18年間の経験を活かし、専門医である泌尿器科領域だけでなく、プライマリケア（さしあたりどんな病気でも診て、必要があればしかるべき専門医に紹介する）、簡易人間ドック（CT、エコー、レントゲン、血液検査）などを行って気軽に受診できる地域のかかりつけ医として皆様のお役に立てるよう努力してまいります。仕事が忙しくなかなか受診できない方の生活習慣病予防などのために、ゆっくり受診できるよう平日夜7時まで診療することと致しました。また、病気に対する丁寧な説明、親切で温かみのある対応を心がけ、小さなクリニックならではのきめ細かい医療サービスを提供し、院長はもとより職員全員で「人に優しい診療所」を目指します。今後ともご支援、ご指導のほどよろしくお願いいたします。』

標榜科目は、内科・泌尿器科・皮膚科・外科と幅広かったのも、今より専門医志向が強かった7年前には少し肩身が狭い思い（某テレビ番組で心臓外科の南淵医師が、たくさん標榜しているようなクリニックには行ってはいけないと言っていました）をしたこともあります。最近、厚生労働省が、総合医構想（地域の開業医を総合医と認定することで、地域の中核病院への患者の過度な集中を緩和し、初期診療と専門医療との役割分担を明確にすることを目指す）を進めていることもあり、世の中総合医ブームになりつつあると感じられ、方向性は間違っていないのかなと思う今日この頃です。専門外のさまざまな訴えをしてくれる患者さんたちに教育していただいた7年間でした。系統だてて総合医教育を受けたわけではありませんが、臨床経験を積みながら勉強している

うちに、総合医のはしくれぐらいにはなりつつあるかなと自負しています。

そんなこんなで、ばたばた開業医をしているうちに、やってきたのが2011年の東日本大震災。当院は2階の天井まで浸水し全壊状態でした。しばらくは、サンリアショッピングセンターの一角をお借りして診療し、同年11月には、全壊したクリニックを気合で修繕し診療再開しました。ほんとと安堵していたのもつかの間で、私がインタビューを受けたNHKの番組を見た方もいると思いますが、診療再開2か月後には土地区画整理計画を大船渡市が発表し、数年後にはどうやら石倉クリニックは解体撤去されてしまうようです。今後の方針はまだ未定ですが、逆境に次ぐ逆境を、試練を乗り越える練習をさせるために神が用意してくれたものとして前向きに捉え、頑張りますのでよろしくお願いいたします。

震災時および修繕後のクリニック外観と、今年のクリニック忘年会時のスタッフの写真を供覧いたします。



県立病院各科紹介

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

岩手県立大船渡病院 第一外科長
中 野 達 也

気仙医師会の皆様、日ごろからたいへんお世話になり、深謝申し上げます。

今回は県立大船渡病院の外科のご紹介をさせていただきます。私自身は平成23年4月から当院に赴任しておりますが、その後もスタッフの入れ替わりがあり、ご迷惑をおかけしております。平成23年8月から外科のスタッフは1名減の6名で、外来・病棟では、緩和医療科長の村上雅彦を含めた7名体制で診療にあたっています。

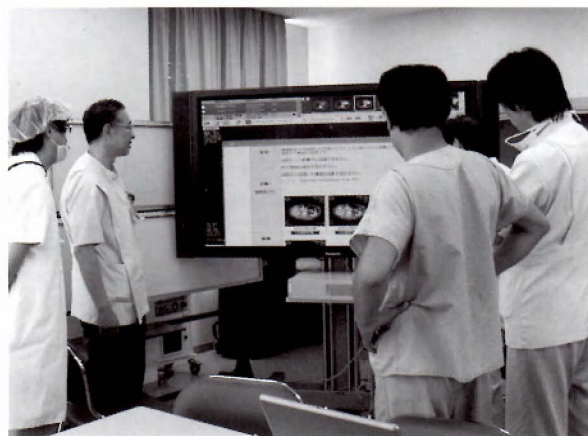
手術についてみますと、平成23年1月～12月の手術件数は、総手術数615件で、全身麻酔は449件（前年462件）とわずかながら減少しました。震災のあった3月は大きく減少しましたが、4月以後は平年並みに回復しています。当院の外科の特徴としては、血管外科医が2名（関根祐樹、三浦禎司）おり、他施設に比べて血管の手術が多いことがあげられます。平成23年の血管の手術は44件で、腹部大動脈瘤手術や閉塞性動脈硬化症に対する血管内手術も行っています。また、下肢静脈瘤に対する治療も行っています。消化器がんの手術は食道がん3件（3）、胃がん23件（31）、結腸がん44件（47）、直腸がん18件（30）、肝細胞がん11件（8）でした（括弧内は平成22年件数）。胃がんおよび直腸がんが減少傾向でした。乳がん手術例は29件と前年と同数でした。肺疾患では気胸に対する胸腔鏡下ブラ切除を行っています。肺がんは専門性から呼吸器外科医のいる病院にお願いしています。ご紹介いただく機会の多い、成人単径ヘルニアが82件、急性虫垂炎が27件でした。鏡視下手術は食道がんが2例、胃がん1例、大腸がん5例で、比較的早期のがんに対して行っており、あまり増えていないのが現状です。胆嚢結石、胆嚢炎はほとんどが腹腔鏡下手術で行っています。今年の手術件数は、現時点で微減といったところで

す。震災後の対象医療人口の減少が一因と考えられます。

外来は平日3名で行っています。特殊外来として、月2回の乳腺外来（東北大学医師）および週1回（金曜日）血管外来を行っています。また、認定看護師によるストマ外来、リンパ浮腫外来も行っております。近年大腸がんを中心に有効な化学療法剤が開発され、外来化学療法室を利用した化学療法が年々増加しています。乳がん、大腸がんを中心に外来化学療法加算1は、平成23年度に計1,194件（22年度比116%）でした。

当院では今年9月から、地域医療福祉連携室が開設されました。病院全体としては連携室を通じての紹介が徐々に増えてきているようです。連携室を通じての紹介は基本的に受診日を予約する形になりますので、虫垂炎のような緊急を要する疾患に関してはこれまで通り外科外来または外科医師にご連絡いただければスムーズかと思います。

以前からの傾向ですが、盛岡など他院での手術を希望される方が少なくないようです。お子さんが内陸に住んでいるという場合もありますが、住民の当科に対する信頼度が低いことも原因と考えられます。現在、外科の病床には余裕があり、当科としては手術症例を増やしていきたいと考えております。そのためには先ず医師会の皆様から信頼されるような診療をしていきたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



学術講演会

◆日時：平成24年11月21日（水）18：30～

◆場所：リアスホール1F マルチスペース



「てんかん診療の新時代 ～誤診と誤治療から学ぶ～」

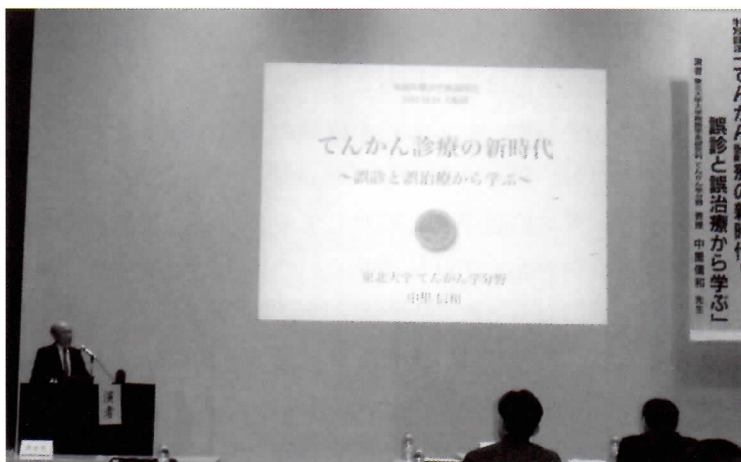
東北大学大学院医学系研究科てんかん学分野

中 里 信 和

医師がてんかんになると、自分で抗てんかん薬を処方して失敗しがち、との報告がある（Allen, et al. Neurology 2007）。医師の多くが自分を治療してしまうという事実は、てんかん患者の多くがベストの治療を受けられないことを意味する。てんかんは有病率約1%の「ありふれた疾患」であり、日本では約100万人の患者数があると推測される。てんかんは適切な治療によって7割以上の患者で発作が抑制され、普通の人たちと同じ生活をおくることができると言われているが、非専門的治療が放置されると、患者も主治医もそれに気づかないまま、治るべき患者が治らずに放置される事態につながる。診療には専門医と非専門医の連携が必要である。

てんかん診療はここ数年で大きく進歩している。特に、長時間ビデオ脳波モニタリング、新規抗てんかん薬、外科治療の3つに関する最新情報は、プライマリ・ケア医に是非とも届けたい。プライマリ・ケア医にお願いしたいことは、発作が少しでも残っている患者や、発作がゼロでも何らかの悩みを抱える患者を、ためらわずなるべく早く専門医に紹介してもらいたい、ということである。専門医においても、連携は重要である。てんかん患者の悩みは多岐にわたるため、小児科、神経内科、精神科、脳神経外科などの関連各科の医師がチームとして診療にあたるのが重要である。専門医や専門施設の数に限られているため、専門的な評価を終え治療の目処がたった患者に関しては、再びプライマリ・ケア医に戻ってもらい、さらなる継続治療を受けてもらうべきである。わが国全体では百万人と推定される患者の多くを幸せにするためには、限られた専門医と多くのプライマリ・ケア医との連携がきわめて重要である。

てんかん診療に名医は要らない。むしろ名医は危険かもしれない。大切なのは、患者ひとりひとりの一生を見守るためのチーム医療であろう。



気仙医師会での講演にを前にして、正直、私は不安でいっぱいでした。気仙で育ったのに気仙を離れている自分が、どんな顔を下げて行けば良いのかと。しかし、運命の関係ともいえる中野達也先生と滝田有先生、さらには昔、父や母がお世話になった先生方や、そのご子息に囲まれて話をするうちに、私の気持はずいぶん落ち着いてきました。仙台で自分の仕事に集中するしかない、と今はハッキリ思えます。気仙医師会の皆様、どうもありがとうございます。これから尚一層、よろしくお願い申し上げます。

平成24年12月17日 中里信和

中里先生の講演会を終えて

岩手県立大船渡病院 副院長兼第一外科長 中 野 達 也

去る11月21日、東北大学てんかん学分野中里信和先生をお招きして、気仙医師会学術講演会がリアスホールで開催されました。『てんかん診療の新時代～誤診と誤治療から学ぶ』のタイトルで、先生の治療経験を元に最新の治療の状況や先生のご活動についてご講演いただきました。豊富な画像を交え、わかりやすく引き込まれるような、そして聞き手に先生の熱意と人柄が伝わる感動的なご講演でした。また、先生ご自身も陸前高田のご出身であり、地元に対する深い思い入れがあったようです。

ご講演後の情報交換会にも多数の方々にご参加いただき、中里先生を囲んで盛会となりました。さらに場所を屋台村に移し、震災、研究、思い出話など深夜まで楽しいひと時となりました。

ご参加いただいた方々には非常に好評であった講演会ですが、先生の研究や診療に対するご姿勢はこれから研究や専門医の研修をはじめ若い医師にも是非とも聴講させたいと感じました。お忙しいと思いますが、またの機会に再度のご講演をお願いできればと思う次第です。中里先生、滝田会長、よろしくお願いします。

気仙医師会学術部長・越喜来診療所所長 佐々木 道 夫

《もう、5.6年学術部長として、沢山の先生方の講演を拝聴しているが、今回の中里先生の講演ほど印象深かったのではないと思う。もちろんだの先生の講演も浅学な私にとっては勉強になることばかりであり、いつも興味深く聞いているのだが、今回はそのどの講演にもない何かを感じたのである。

もちろん一番は、講演の中身である。てんかん患者さんへの心からの思いやりからくる診療態度、てんかん治療を、多くの一般医にも知って欲しいという専門医の情熱が伝わるわかりやすい薬物治療の紹介、そして、きちんとした治療さえすればほとんどのてんかん患者さんは救われるという学問的裏付けを持った楽観性、などなど、見よう見まねで治療している私にとっては目から鱗の連続であった。

しかし、印象深かったのはそれだけではないと思う。後半に、高田出身の先生は、津波にのみ込まれてしまった自分のふるさとや亡くなった友人達の映ったスライドを見ながら少し言葉に詰まる場面があった。必死にこらえていたようなので、気づかなかった先生方もいらっしゃるかもしれないが、今回の津波被災に際し、自らその場にすることができなかった先生の何ともいえない悔しさと悲しさが伝わってきた。地元にて被災した我々とは違ったつらさ、悲しさが先生の胸をいっぱいにしていることが感じられ、こちらまで胸が熱くなってしまった。本当の意味の支援・連帯を感じた講演となった。

それにしても、何とすばらしいプレゼンであったことだろう。座長を務めていただいた、県立病院の中野先生が「プレゼンの名手」と紹介してくれたが、言葉に偽りはなかった。要旨は簡潔にしてわかりやすく、時折挟む逸話やジョークは私達をぐいぐいと話しに引き込んだ。そして何といっても見事なスライドのできである。丁寧につくったことがうかがえる美しく、ハッとするような映像の連続であった。時々講演のまねごとをする私にとっては、またとない講演術の研修機会ともなった。

機会があったら、ぜひもう一度でも、二度でも聞いてみたいと思ったのは私だけではあるまい。

◎ 講演の詳細については、気仙医師会HPを参照下さい。

平成24年 気仙医師会忘年会並びに
 山浦 玄嗣 先生「文部科学大臣表彰」
 佐々木道夫 先生「へき地医療貢献者表彰」
 受賞祝賀会開催される

平成24年12月6日（木）に盛町千葉幸会館にて盛大に開催された、滝田会長から本年の締めくくりと新しい年が良き年となり復興が目に見えた形で進むことを期待する旨の挨拶、引き続き「文部科学大臣」及び「へき地医療貢献者」表彰された両先生に対して祝意を述べられた。



（滝田会長挨拶）

表彰された両先生のご功績



（受賞者を代表し山浦先生より謝辞）

平成24年度「文部科学大臣」表彰

やま うら はる つぐ
 山 浦 玄 嗣 先 生

11月8日に熊本県熊本市で開催された学校保健及び学校安全大会で「表彰式」が行われた。

学校医歴・昭和61年4月に山浦医院を開業以来26年余の長きにわたり、日頃市小、中学校の学校医を務め、定期的な健康診断、保護者向けの講和や助言を通じての児童生徒の保健衛生向上に努められたこと等の功績が認められたことにより表彰された。

※平成24年度「へき地医療貢献者」表彰。

～山浦玄嗣先生からのコメント～

文部科学大臣表彰をいただきました。この26年、日頃市の小中学校で校医を勤めて御苦労であったというのが理由です。大したことをしたわけでもないのに、「勿怪」なことだと、憤って頂戴いたしました。ありがとうございます。

平成24年度「へき地医療貢献者」表彰

さ さ き みち お
 佐々木 道 夫 先 生

全国自治体病院協議会と全国自治体病院開設者協議会からの表彰

去る、9月24日に大船渡市役所三陸支所で大船渡市長から伝達された。

平成3年に越喜来診療所に着任以来、20余年にわたる地域医療に献身的な貢献が認められたことにより表彰された。



新入会員の紹介

◇◇◇ 伊藤達朗先生 ◇◇◇

入会日 平成24年4月1日

出身地 盛岡市

出身校 自治医科大学

勤務先 県立大船渡病院

◇◇◇ 川合秀治先生 ◇◇◇

入会日 平成24年12月1日

出身地 大阪府河内長野市

出身校 熊本大学

勤務先 松原クリニック

◇◇◇ 佐々木輝夫先生 ◇◇◇

入会日 平成24年12月25日

出身地 盛岡市

出身校 岩手医科大学

勤務先 県立大船渡病院

みんなの **いわて** を
医 協
ご利用ねがいます

医療用品カタログ通販 5,000品目満載 最大89%引き

医用印刷物・医療機器・医療事務機器・衛生材料
等々・保険事業・医療廃棄物処理事業(収集から
各種報告書作成まで)・福利厚生事業・労働保険
事務代行事業

TEL.019-626-3880

購買専用
フリーダイヤル **0120-054-222**

FAX.019-626-3883

URL <http://www.ginga.or.jp/isikyo>

E-mail isikyo@rose.ocn.ne.jp



いわて医師協同組合

IWATE MEDICAL COOPERATIVE ASSOCIATION

〒020-0024 盛岡市菜園二丁目8番20号 岩手県医師会館内